

近世東アジアにおける漂流民送還体制の形成

春 名 徹

はじめに

近世における漂流は、人と物と情報の交流の歴史の一環として位置づけられるべきものである。日本においては相当数の漂流民の記録が保存されているが、従来、もっぱら海難の結果、異国に漂着、送還された船員たちの異文化経験が主な関心の対象とされてきた。これは近世の日本が対外関係を著しく制限したいわゆる「鎖国」体制のもとにあったため、直接に異文化と接触し得た漂流民の経験が為政者によって重視されてきたという歴史的な状況に由来するものである。

これにたいして、漂流民が送還される背景には最小限の外交関係が必要であることを指摘し、漂流民がどのような手続きを経て相互に送還され、その背後にはどのような体制が国内的・国際的に成立していたかを最初に考察したのは荒野泰典氏である。^(注1)この論考の先駆性は高く評価しなければならないが、『通航一覽』などを主な材料として日本を中心とした送還の手続きを考察しているため、近世の東アジアの秩序の中心に位置していた中国において現実に成立していた漂流民の送還手続きが欠落してしまっている。その意味で、不充分さを免れないように思われる。

本稿の主な目的は、近世の日本人が意識するか否かはともかく、現実には中国の清帝国と周辺諸国とのあいだで冊封関係を前提にして漂流民を相互に送還する体制が成立しており、日本の漂流民の送還もまたこの制度と無関係ではあり

得なかった事実を提示することにある。その全体像を把握するならば、むしろ近世日本の漂流民送還体制は、中国の制度の存在を認識することないまま成立していたことに特質を見出すべきだとさえいえるであろう。

この立場から、中国を中心とする琉球、朝鮮、日本のあいだで漂流民を相互に送還する手続きについて概観してみる。その上で、このような制度の存在が、当の漂流民や為政者の意識にどのように反映していたかを検討することにする。このようにして初めて漂流民の異文化経験を総体として捉えることが可能となるだろう。それは経験もまた制度によって規定される側面があるからに他ならない。

一、清帝国における漂流民送還体制の確立

(1) 清帝国の成立と日本人漂流民

まず、近世の日本人の中国にたいする漂流とその送還の実態を概観しておく。

まさに清帝国が成立した一六四四年に、現在ロシア領、沿海州ポシェット湾付近に越前三国の商船三隻が漂着し、乗組員の一部は、清国官吏に救出されて瀋陽を経て北京に送られ、そこで越年の上、朝鮮を経て送還されるという事件が起きた。^(注2) 清帝国は新しい王朝の威信にかけて、越前漂流民を送還することとし、たまたま朝鮮へ赴くことになっていた冊封使に託し、ソウルに送るとともに、朝鮮王にたいして日本への送還を命じたのであった。

すなわち『大清歷朝実録』の順治二年（一六四五）十一月につぎの記事がある。

十一月己酉朔。諭朝鮮国王李倬曰、今中外一統、四海為家、各国人民、皆朕赤子、務令得所、以広同仁、前有日本国民人一十三名、泛舟海中、飄泊至此、已敕所司、周給衣糧、但念其父母妻子、遠隔天涯、深用憫惻、茲命随使臣、前往朝鮮、至日、爾可備船隻、転送還郷、仍移文宣示、俾該国君民、共知朕意。^(注3) 『世祖章皇帝（順治）実録』二年十一月一日条。

（十一月一日、朝鮮国王李倬（仁祖）に命じた。今国の内外は統一され、四海は一家となった。各国の民はすべて朕の子であり、つとめてその所を得させめ、等しく扱いたいと思う。先に日本人十三名が舟で海中に漂い、わが国に至った。既に役人に命じて衣食を給

与しているが、その父母妻子や遠く故郷を隔たっている境涯を思いやると憐れみに耐えぬ。ここに貴国あての使節に随行させ、朝鮮に送る。時至らば船を用意して送還されたい。また文を添えて日本の支配者、民衆に朕の意のある所を知らしめよ)

これはあくまで現実に発生した漂流民に対処するための臨時措置ではあるが、成立したばかりの国家の威信の表明として送還が位置づけられていることは注目ししよう。またこの場合、威信の表明は、日本人にたいする態度であるとともに、清朝に服属して日の浅い朝鮮王朝にたいする威信の表明の意味もあったことは見逃せない。

さらに「今中外統一、四海為家、各国人民、皆朕赤子」という文言は、世界帝国の皇帝として外国人をも一視同仁に顧みるといふ基本的な立場の表明であって、後の漂流民送還の思想的な根拠はすでにここに表明されているとみなすことができる。

(2) 康熙の海禁解除と中国人の送還

一般にいうならば、中国が冊封体制という伝統的な形式で周辺諸国と外交関係を取り結ぶ以上、宗主国たる中国と付庸国とのあいだで、漂流民が生じた場合、これを相互に送還することは論理的に必然の結果であった。

すでに明朝において海禁政策を実施していた時代に漂着朝鮮人を送還した例がある。成化二十三年(一四八七)、推刷敬差官に任ぜられて済州島に赴いた朝鮮王朝の官吏、崔溥は、翌弘治元年正月、父の訃報に接して服喪のため故郷の全羅道に帰る途中、悪天候にあって漂流し、十四日にわたる漂流のすえ、閏正月十六日、中国の浙江省台州に漂着した。

たまたま倭寇が来襲した直後であったため、倭寇の疑いを受けて厳しく審問されたが、明と冊封関係にある朝鮮の官人であることが判明するとともに丁重に扱われ、北京を経て陸路、送還されている。^(注4) 明の万曆四十年(一六一二)八月に同じ台州に漂着した女性を含む日本人十二人が送還されずにすべて死亡するに至った事実と対比すれば、漂流民送還を保証する前提に冊封関係つまりは外交関係があったことの傍証ともなるう。^(注5)

清帝国は成立当初、明の遺臣を称する鄭成功が台湾に依っていたため、遷海令を実施して沿岸貿易を禁止し、台湾への経済封鎖政策をとっていた。さらに康熙十二年(一六七三)には三藩の乱が起きたため、清は対外政策を確立する余裕

がなかった。

しかし康熙二十年（一六八一）、三藩の乱は鎮圧され、二十二年には台湾に依っていた鄭氏も降伏して和平が戻ったので、翌二十三年、すでに経済活動を制約するものと感じられつつあった海禁を解除するに至った。

これにともなう今後、中国人の各省人民が海上貿易に出海する者が多くなることを予想されるので、海外の朝貢諸国の王に中国人の漂着する者を保護し送還することを命じる、という内容の上諭が出されたのは、康熙二十三年三月二十八日付である。

この上諭にかんしては実録には記載がないので、琉球王国の『歴代宝案』にしたがう。康熙二十三年八月二十二日付の琉球国王宛て礼部咨文によって引用する。管見の範囲ではこの記事が初見である。^(注6)

礼部為解送出海人口事。主客清吏司案呈、奉本部送、礼科抄出「該本〔部〕題覆、朝鮮国王李焞咨『前事等因、奉旨〈海禁已開、這漂失船隻、民人着發回原籍、其解送來人應行獎賞爾部会同兵部議奏、欽此〉、該臣等會議得、朝鮮国解到、漂海山東登州府蓬萊縣民、張文学等參人、遵旨發回原籍、應聽兵部遞送、其海禁已開、各省民人海上貿易行走者甚多、應移文浜海外国王等、各飭該管地方、凡有船隻漂至者、令收養解送。查前此、朝鮮国解送漂海人口、來者官賞銀參拾兩、小通事賞銀捌兩、從人賞銀各肆兩、於戶部移取賞賜、礼部恩宴壹次。嗣後外国如有解到漂失船隻人口、照此例賞賜恩宴、遣還其彼處收養漂夫船隻人口之人、應令該国王獎勵賜、俟命下之意曰、將所行朝鮮国咨文、与來員帶回。所行琉球等国咨文、俟該国進貢時、令來使帶回。現今朝鮮国差來副司猛尹之徽、小通事壹名、從人拾壹名、共賞銀捌拾貳兩、於戶部移取賞賜、礼部恩宴壹次、令回國可也』等因、康熙貳拾參年參月貳拾捌日題、肆月初參日奉旨〈依議欽此處、欽遵〉」抄出、到部送司奉此、相應移咨。為此合咨前去、煩為查照旨內事、理欽遵施行、須到咨者。

右 咨

琉球国王

康熙貳拾參年捌月貳拾貳日

咨

〔礼部より〔琉球国王あて咨文〕。漂流民を護送する事にかんして。礼部の主客清吏司が提案し、礼部を通じて都察院の礼科に送ったところ「礼部の題覆には『朝鮮国王李焯、前事について書簡を送る、等とあり、皇帝から海禁はすでに開いたので、この漂流した船と乗組員とはただちに原籍地に送還せしめよ、その護送にあたった人になりたいしてはまさに奨励賞賜すべきであるから、なんじ礼部は兵部と会合して奏上するように』との指示を得た。よって兵部と礼部とが合同で議したところ、朝鮮国が送還した山東省蓬萊県の民、張文学など三人は、皇帝の指示にしたがって原籍地に送還するため、兵部によって送還の事を行うことを許すべきである。海禁はすでに開かれ、各省の民が海上貿易に従事する者がはなだ多いので、海に面した外国の国王に書を送って、それぞれの支配する地方に命じ、およそ中国船の漂着するものがあれば、保護を加え、護送させるべきである。〕

調査した所、それより以前に朝鮮国から漂流民を護送して来た者になりたいしては、官吏に銀三十両、小通訳には銀八両、従者には各人四両を賞として与えている。この賞給は、戸部に達して必要な銀両を調達させ、礼部主客清吏司から渡したもので、他に礼部は彼らのために宴席を一度設けている。

以後、もし外国が漂着の船舶や乗組員を護送してきた場合には、この例を参考にして賞給し、宴席を設けて帰還させたい。外国において漂着船と船員とを保護した人になりたいしては、その国の国王より賞を与えるよう要請したい。皇帝からの命を得る日を待ち、朝鮮国にこのように命ずる咨を得て、来朝した官吏に与えて帰国させたい。

琉球などの国にかんしては、その国から進貢使が来朝した機会に書を与えよう。現在、朝鮮国から来ている副使、猛尹之徽、小通事一名、従者十一名には合計銀八十二両（つまり三十両、八両、四両ずつ十一名分四十四両の合計）を戸部から出供して礼部によって支給し、さらに礼部から宴席一回を設けた上で帰国させてよいであろうか』と康熙二十三年三月二十八日に題奏したところ、四月三日に〈合議のとおりにせよ〉との皇帝の指示を得た」と（礼科からの）礼部あての通達を得た。よって主客清吏司はこれを奉じて汝、琉球国王に転送するものである。文中にある皇帝の指示を参照し、つつしんでこれを実行するように。

右のとおり琉球国王に書簡を送る。

康熙二十三年八月二十二日

この文章は、中国の公文書の慣例にしたがって命令の成立過程がのべられているので、いささか煩雑であるが、文書自体は清の外交を司る礼部のうち主客清吏司という部局から琉球国王に宛てた咨文であって、漂流民送還についての原

則を通達するものである。原文を「……」で括った部分は、都察院の礼科という部局から礼部への指示（抄出）であり、この政策の立案過程が示されている。朝鮮国王から漂流民を送還するという事件を期として礼部と兵部が合議し、皇帝が指示を与え、政策が決定されたのである。

したがって『……』内の礼部・兵部の題覆が主要な内容をなすものである。

それは要するに朝鮮国王が山東省登州府蓬萊県の張文学ら三人の漂着中国人を送還した事例を範にとり、海禁を開くにあたって予想される中国人の沿岸諸国への漂流にさいして送還をもとめるとともに、送還のさい銀をもって報いることを規定したものである。

礼部と兵部が立案し、これを皇帝が承認するという通常の形式をとって、これが皇帝の指示となった。これを礼部の主客清吏司が琉球国王に伝達しているのである。

その中心部分は官僚の上奏にたいして皇帝が与えた指示（ここでは「旨」という語で示されている）である。つまり「其海禁已開、各省民人、海上貿易行走者甚多、応移文浜海外国王等、各飭該管地方、凡有船隻漂至者、令収養解送」（海禁はすでに解除され、中国各省の海上貿易に従事して航海する者がはなはだ多くなった。したがって海に面した外国の諸王に書を送り、その支配する地方に漂着する者があれば保護、送還するようにせしめる）という部分である。事実、その後、琉球王国は、漂着中国人送還にあたって咨文中に常にこの部分を引用しては原則を確認している。

この規定は「浜海外国王」にたいする中国の要請である。冊封体制のもとでは天下で皇帝と称することができるのは、唯一、中国の権力者であり、「国王」とは清の冊封を受け、中国の皇帝によって認定された近隣国の支配者を意味している。したがってこの規定は、あくまで清と冊封関係をもつ国を対象としたものといえる。

（3）漂着外国船の送還規定の確立

だが中国が琉球、朝鮮にたいして宗主国の立場をとる以上、朝貢国の側の国民が中国に漂着した場合にも送還の義務が生じてくることは必然の結果といえた。

現実に『歴代宝案』では琉球国の民十二人が康熙十六年（一六七七）に福建布政司の手で送還された例をはじめとし、雍正二、四年にも漂着、送還があったことを記している。^{（注7）} また清朝とは冊封関係をもつことがなかったとはいえ、日本の漂流民が中国沿岸に漂着する現実があったことは後にみるとおりである。

このような事実を前にして、康熙帝の要請から約五十年を経た乾隆二年閏九月十五日（洋暦一七三七年十一月七日）に次の上諭が出され、外国船と乗組員の送還が規定されるに至った。^{（注8）}

閏九月十五日。命恩恤難夷。諭、聞今年夏秋間、有小琉球中山国装載粟米棉花船二隻。遭值颶風、断桅折舵、飄至浙江定海・象山地方。随經大学士稽曾筠等、查明人数、資給衣糧、將所存貨物、一一交還。其船及器具、修整完固、咨送閩省附伴歸国。朕思、沿海地方、常有外国船隻、遭風飄至境内者。朕胞與為懷、内外並無岐視。外邦民人、既到中華、豈可令一夫之失所。嗣後如有似此、被風飄泊之人船、著該省督撫、督率有司、加意撫恤。動用存公銀兩、賞給与衣糧、修理舟楫、並將貨物查還、遣歸本国、以示朕懷柔遠人之至意。將此永著例。〔高宗純皇帝（乾隆）實錄〕卷五十二（二十六丁）

〔閏九月十五日、遭難した異国人の救済を命じた。皇帝の勅語にいう、聞くところによると本年春秋のあいだに琉球の中山国の米穀や綿花を積んだ船二隻が台風に吹き流され、帆柱や舵を失って浙江省の定海、象山地方に漂着したという。大学士稽曾筠らを派遣して人数を確認し、衣食を与え、積載した貨物は返還してやった。破損した船は船体や装備に修理を加え、福建省から琉球使に伴って帰国させた。〕

考えるに風に流されて中国の領域に入る外国船はつねに存在する。自分は自国民と外国人とを等しく扱っており、外国人とはいえ中国の領域に入った者が一人として失われるようなことがあってはならない。今後、この例のように漂着した船と人とは、管轄地方の総督と巡撫に命じて、官吏に救済を与えさせ、公金をもって衣服・食糧を給付し、船には修理を加え、貨物は返還して本国に帰国せしめることとする。これは皇帝の遠人懷柔の誠意を示すものである。これを長く例となせ」

二件の琉球船の中国漂着という具体的な事件を契機としてはいるものの、救済措置は一般化され海難に遭遇した外国船とその乗組員の送還が制度として確立されるに至った。ここでは既に中国との冊封関係の有無は問題とされず、外国

船一般に対象が拡大されたことに注意せねばならない。

この規定は行政法の施行例を集めた『大清会典事例』のなかで、戸部の管轄する実務の「蠲恤」(けんじゅつ)の一部として「撫難夷」という条によって明示されている。ここでは「実録」の記事を一般化するために文言に多少の修正を加えて、中国へ漂着した「難夷」の救助と送還を規定している。念のために下に全文を載げる。^(注9)

乾隆二年諭 今年夏秋間、有小琉球国装載粟米棉花船二隻。遭值颶風。断桅折柁。飄至浙江定海・象山地方。随經該省督撫查明人数、資給衣糧。將所存貨物。一一交還。其船及器具。修整完固。咨送閩省附伴歸国。朕思沿海地方。常有外国夷船。遭風飄至境内者。朕胞與為懷。内外並無岐視。外邦民人。既到中華。豈可令一夫之失所。嗣後如有似此。被風飄泊之船。著該省督撫。督率有司。加意撫恤。動用存公銀兩。賞給与衣糧。修理舟楫。並將貨物給還。遣歸本国。以示朕懷柔遠人之至意。將此永著例。

この送還規定では、中国人と他国の人を区別しない一視同仁の考えが示されるとともに、思想的な根拠として「遠人懷柔」が置かれている。これは『中庸』章句第十九章のなかの言葉で、天子が天下国家を治めるのに必要とされる九つの徳の一つとされるものである。すなわち「凡そ天下国家を為むるに九經あり。曰く、身を脩むるなり、賢を尊ぶなり、親を親しむるなり、大臣を敬するなり、群臣を体するなり、庶民を子とするなり、百工を来すなり、遠人を柔するなり、諸侯を懷くるなり」とあるのによる。

以下、本論文ではこの規定を「難夷撫恤令」と呼ぶことにするが、制度化によって漂流民送還が開始されたのではなく、現実に漂流民が存在したために送還が起こり、それが制度化を促したのだという事実を改めて認識しておきたい。

二、清朝における送還実務の処理

この後、中国に漂着した外国船はすべてこの難夷撫恤令の原則にしたがって処置されるようになった。すでにみて来たとおり、難夷撫恤令は琉球、朝鮮船の漂着する現実にもとづいて定められた原則であるから、広く運用され、直接に

冊封関係をもたなかった日本船にも適用されるに至ったのである。

中国にかかわった送還数については、いまの段階では私はまだ全貌を把握するにいたっていない。だが、このうち琉球王国にかんしては『歴代宝案』に集められた文献に見る限りでは、朝鮮漂流民を中国をつうじて送還した事例は二十一例、中国人の送還は四十九例、これにたいして琉球人の中国漂着は康熙令以後にかぎっても七十七例を数える。^(注10) 琉球王国の場合、乗船が修理不能の場合は、漂着朝鮮人、中国人ともに多くは琉球からの進貢・接貢船に附搭して福建に送還した。朝鮮人の場合はそこから陸路、北京を経て送還された。

日本船の中国漂着・送還例にかんしては体系的な史料はないが、私の把握し得た限りでは清朝の成立した一六四四年から一八五三年までに五十三例を数える。このうちには安南、マニラ、東南アジア、そして欧米船などで救助され、最終的に中国からの送還ルートによって送還された例十四を含んでいる。他に鄭氏の占拠中の台湾からの送還例が一つある。

これにたいして、日本に漂着した中国船の送還例は三十六例ある。その多くは長崎貿易船が航路を失ったものであるが、十九世紀になると国内航路の船の漂出した場合もあり中国の国内航運の活撓化を反映しているかにみえる。^(注11)

中国の皇帝独裁制とは、とりもなおさず官僚制でもある。そして官僚制は文書の頻繁なやりとりによって維持されている。したがって皇帝を中心とした秩序のもとにおける漂流民送還の手続きは、現実には文書として政治に反映した。

日本人漂流民の記録からみると、沿岸に外国船が漂着すると、まず沿岸住民が保護を与え、役人に通報される。最初に接触して状況をただすのは、海岸警備の陸軍の武官(清朝の軍制にいう緑營の千総、把総などという官。千総はほぼ尉官相当)が多いようである。筆談などによって国籍が判明し、海難に会った漂流船員であることが確認されると県の長官クラス(知県)の文官に報告される。以下、住居の手配、衣食の供給、積み荷の処置、国内での移動などは、清朝における末端の行政区画である県のレベル(時にはその上の府のレベル)で行われる。知られるかぎりでは知県が直接に審問にあたる例が多かった。^(注12)

船員の身柄は、沿海の日本むけ貿易船に委託されて長崎へ送還された。初期には漂着先の官吏が直接、日本むけの貿

易船に依頼していたが、日本の正徳新令前後からは、貿易船の出航地は浙江省の乍浦に集中したので、多くの場合、この地を経由して送還された。乍浦集中が進むにしたがって同地の滞在中の撫恤の実務は日本向けの商人に委ねられていた。^(注13)

一方、中国における行政文書の流れとしては、まず地方官から報告書が上級の地方長官である総督ないし巡撫（つまり「督撫」）に送付される。総督ないし巡撫は、この報告にもとづいて皇帝あてに報告を行い、行政法の規定にもとづいて（つまり会典事例に示された「撫難夷」の規定のとおり）、保護、送還を行いたいと摺文によって上奏し、皇帝はこれに承認を与えるという形式をとる。

皇帝は摺文に意見を書き込む。道光朝の実例では、承認の印として形式的に「欽此」（これをつつしめ）と朱筆で記すのみの場合が多い。このように皇帝が上奏文に意見を加えることを硃批という。

この長官の督撫と皇帝のあいだでやりとりされた文書は、原文が宮中に保管される他、写本（副本）が作成される。実録には、皇帝が硃批を加えた日付で「某月某日、撫卹○○国難夷如例」と記載される。この「例のごとく」は、日本語としては「行政法上の慣習にしたがって」と理解すべきである。つまり先に引いた『大清会典事例』の「撫卹難夷」の規定にしたがって給養、送還を行ったという意味である。

中国の実録の性格については、皇帝個人の行動や宮中行事の記録であるという誤解があるが、すくなくとも明・清朝にかんする限り、その実質的な内容は皇帝が内閣・軍機処などの「政務統一の機関」（織田萬『清国行政法』）の補佐を受けて起草する上諭（すなわち、中央・地方の諸官庁への訓令）ないしはその要点を記した記事を日付順にならべたものである。つまり、逆にいえば、実録の記事を索引として利用することによって清朝の漂流民送還の実態を把握することが可能となる。^(注14)

皇帝が硃批を加えた上奏文（奏摺）は、まず上奏者のもとに返送され、上奏者は硃批の内容を手元の控（摺稿）に記入した上で送りかえす。これを繳回硃批奏摺とよび、「宮中檔案」として保存される。これとは別に軍機処では奏摺を処理するさいに写し（録副本）をとって、日付順に「摺包」という袋に入れて軍機処の文書保存場所である方略館大庫に保管

する。現在、前者は四十万件、後者は六十万件余りが保存されている。

このうち、宮中檔案のごく一部が一九三〇年代に「道光朝外交史料」などの名で鉛印、刊行された。その中に、日本船の漂着にかんする地方官の奏摺に硃批を加えたものがある。これを実録とを比較検討することによって上記のような文書の流れが証明できる。

朝鮮、琉球の場合、公開された清朝側の史料はかならずしも多くないが、それぞれの国の豊富な文献が補完してくれるので、ほぼ同様の文書の流れが把握できる。

状況の一端を示すため、道光六～七年（一八二六～二七）という短い期間に限定して難夷撫卹記事をつぎに掲げてみる。この二年間だけで日本四、琉球、朝鮮十一の記載がある。後述するように、これらの記事一例がかならずしも漂流一件に対応するわけではないし、この両年は比較的、漂流が多い時期にあたったことも事実だが、それにしても日本、朝鮮、琉球のあいだで相互に頻繁に漂流民送還が行われる状況にあったことは認識できよう。

道光六年丙戌〔西曆一八二六年〕

- ① 一月辛卯（九日／陽二月十五日）撫卹日本国遭風難夷如例（『清実録』（三十四）五一五ページ下。以下、盛京崇謨閣版による丁数を併記する。卷九十四／十二丁表裏）
- ② 二月乙丑（十三日）撫卹琉球国遭風難夷如例（五四〇ページ上。卷九十五／十八丁裏）
- ③ 六月壬子（二日）撫卹日本国遭風難夷如例（六〇五ページ上。卷九十九／二丁裏）
- ④ 七月庚子（二十日）撫卹日本国遭風難夷如例（六五三ページ上。卷百一／二十丁裏）
- ⑤ 九月戊子（十日）撫卹琉球国遭風難夷如例（七三七ページ下。卷百五／三十丁裏）
- ⑥ 十月己酉朔（一日）撫卹琉球国遭風難夷如例（七六九ページ下。卷百七／七丁裏）
- ⑦ 十月癸亥（十五日）撫卹琉球国遭風難夷如例（七八六ページ下。卷百七／四十丁裏）
- ⑧ 十二月癸丑（六日／陽一八二七年一月九日）撫卹日本国遭風難夷如例（八五四ページ下。卷百十一／十九丁裏）

- ⑨ 十二月丙寅〔十九日〕撫卹朝鮮国遭風難夷如例（八七一ページ上。卷百十二／八丁表）

道光七年戊亥（一八二七年）

- ⑩ 二月庚申〔十四日〕撫卹日本国遭風難夷如例（九〇九ページ上。卷百十四／二十二丁表）
⑪ 四月甲子〔十九日〕撫卹琉球国遭風難夷如例（九五九ページ下。卷百十六／三九丁表）
⑫ 六月辛丑〔廿七日〕撫卹朝鮮国遭風難夷如例（二〇二五ページ。卷百二十／三十二丁表）
⑬ 八月甲午〔廿一日〕撫卹琉球国遭風難夷如例（二〇七六ページ。／卷百二十四／二十丁裏）
⑭ 十一月己酉〔八日〕撫卹琉球国遭風難夷如例（一一五二ページ上。卷百二十九／十九丁表）
⑮ 十二月辛卯〔廿日／陽一八二八年二月五日〕撫卹琉球国遭風難夷如例（一一八二ページ下。卷百三十一／三十丁表）

このうち①は文政三年（一八二〇）パラオに漂着した陸奥の神社丸、③④は同年に江蘇省の長江河口付近に漂着した薩摩船財久丸にかんする記事である。財久丸については③江蘇巡撫と④浙江巡撫の上奏があるため、実録には記事が二度出た。⑩は長江河口に近い江蘇省川沙庁に漂着した越前船宝力丸である。⑧の日本船にかんしては、対応する上奏文が不明だが、おそらく同じ越前船関係の記事だと思われる。つまり五つの実録記事は三例の漂流に対応している。^{（注15）}

⑨⑫の朝鮮漂流民については、中国、朝鮮の記録を得ることができなかった。しかし該当期間に琉球や中国沿岸に漂着し、福州・北京を経て帰還した朝鮮人漂流民は三件十八名があったことが『歴代宝案』から知られるので、このいずれかに対応するのである。^{（注16）}

琉球人漂流民は⑥が浙江漂着の狄士傑ら十九名、⑦⑪が朝鮮全羅道に漂着して陸路送還された大城筑登之ら三名（二名は朝鮮で病死）の例である。後者については朝鮮の『李朝実録』にも対応する記事がある。^{（注17）}

なお、実録に記載はされていないが、同じ期間に中国船の漂流は日本へ二例、琉球に二例、朝鮮に三例がある。^{（注18）}^{（注19）}

つまり角度を変えてみるならば、中国皇帝の実録を一つの頂点として中国と周辺諸国とのあいだには漂流民の相互的な送還をめぐる文書のネットワークが形成されているということが出来る。日本は琉球、朝鮮とのあいだに相互に漂流

民を送還することによって、このネットワークとかかわるが、肝心の中国との相互のあいだでは、現実には相互の送還が存在するにもかかわらず、特別な事例を除いては文書を伴わないという例外的な位置を保った。その原因は、近世日本との関係があらかじめ公的な関係を排除し、貿易に限定した私的關係として設定されていたことによるものといえよう。このことは日本側の意識にも反映せずにはいられなかった。

三、日本における送還漂流民の実態

まず、中国側の送還体制を以上のようなものとして認識した上で、日本側の記録に残る送還例を検討してみるが、このような中国側の送還体制の整備が日本側にはほとんど何の関心も喚起なかったことは問題とするに足りよう。

(1) 難夷撫恤令以前

順治初年（一六四四～五年）の越前三国の漂流民送還の後、一件だけ鄭氏支配下の台湾からの送還があるのを例外とすれば、^(注20)しばらく日本船の中国への漂流は認められない。

ようやく増加の傾向を示すのは元禄前後からである。つまり中国の側からみれば康熙令以降ということでもある。これは三藩の乱を克服した清朝が、南中国への支配権を確立し、広東、福建、浙江など日本船の漂着の可能性の高い沿岸地方を支配下においた事情を反映しているものと考えられる。

康熙二十三年（一六八四）令以降、乾隆二年（一七三七）の外国船撫恤令以前に日本船の中国漂着は、日本側記録で七例を数える（内二例はルソン漂着後、中国を経由して送還されたもの）。このうち、何らかの形で中国官吏の関与が明らかになっている事例はつぎの五つである。

すなわちまず①貞享五年（中国の康熙二十七年＝一六八八）三月に、十人乗りの薩摩の船が広東省の黄浦口（黄埔口である）に漂着、同年六月十五日に長崎に送還された。つぎに②元禄三年（一六九二）には十一人乗りの薩摩船が広東省雷州

へ、③同六年（一六九三）には長門の者十二人が広東省肇慶府陽江県に、④同年、塩飽諸島の谷本源右衛門ら十四人が浙江省の舟山列島の普陀山付近に、そして⑤宝永二年（一七〇五）には陸奥国の船が広東省瓊州府へ漂着している。

これらはいずれも長崎貿易の中国船で送還されたが、送還にあたった中国船船頭の長崎における口述により、中国側の官の関与が明らかにされているのである。

すなわち①については「諸官一所に被致会談、僉議之上、とかく日本之儀は、大清中より商船之往来仕候得ば、其由緒と申旁に候条、船を仕立、相送り可然と評議相究まり、逗留中は飯米酒肴などあたへ被申^(注21)」と送還船の船頭が口述しており、同船そのものが「大事之異国人送り申事に候間、諸事念を入可申候」と役人から注意を受け、私荷物は積まずに送還にあたったのであった。

②の薩摩船について送還船の船頭游伝孚は、「海南之諸役所被会同……段々上官^え付届有之、從上官北京之帝都^え被為相達、則為帝意、日本漂流之者共に候間、随分介抱仕、弥便船に而相送り候様にと旨意被下候に依而^(注22)」送還を託されたとのべた。ここでは地方官が北京の皇帝の指示を仰いで、その指示のもとに送還が行われたとすら述べられているのである。

③の長門船については、船頭宋居勝が「寧波官職より漂流之日本人有之、^(注23)広東より送り来候条、此者乗せ御当地へ罷渡り候様にと被申付、則官職より之証文を申請」、普陀山から出航したと語った。④については、漂流民を送還すべき船が途中で海難にあい、再艤装せざるを得なくなったために帰還は遅れたが、漂着、保護の経過については帰還以前から他の中国船による情報が頻繁に長崎にもたらされていた。このため送還以前から、同船について寧波の官吏が北京へ指示を仰ぎ、その結果をまって送還されるだろうという見通しが、長崎奉行所に知られていた。^(注24) ようやく元禄七年に長崎に帰還した際にも、送還にあたった船頭程敏公は「寧波官家^{より}北京^え通達有之との儀に御座候、北京^{より}之御下知無之内は、何方^えも遣し申儀不罷成候」と、北京の指示にもとづく送還であることを明言している。^(注25) ⑤の場合も送還船の船頭は「右之船に為乗送届候様にと官人方より漂民相渡候由^(注26)」と口述している。

このうち北京の皇帝の指示を仰いだとする②④の場合には中国側の記録に裏づけがなく、逆に言及のない③についてのみ、皇帝の指示があったことが判明している。すなわち康熙三十一年（一六九二）の実録に次の記事がある。^(注27)

九月辛亥、兵部議覆。広東広西総督石琳疎言、風飄日本国船隻至陽江地方、計十二人請発回伊国、応如請。得旨「外国之人、船隻被風飄至広東、情殊可憫、著該督撫、量給衣食、發送浙省、令其国」〔『聖祖仁皇帝（康熙）実録』巻百六十〕

〔九月五日、兵部が議覆した。〕「広東広西総督の石琳が広東省の陽江地方へ十二人の日本人を乗せた船が漂着し、その国への帰還をもとめている旨の報告をして来た件について、兵部は請求どおり帰国させてしかるべきであると上奏する」。これにたいする皇帝の指示はつぎのとおり。「外国の人が船を風に流されて広東に至った。状況は憐れむべきである。石琳に命じて衣食を給与し浙江省へ送って帰国せしめよ」と。

康熙帝の六十一年にわたる治世のあいだで実録に記載された日本漂流民の送還にかんする記事は、この一例のみであるが、現実には他の場合も、少なくとも広東や浙江の地方長官レベルで官が関与して送還を行っていた模様は上記のように送還船の船頭の口述で明らかである。

しかし、この事実を伝える『長崎志』などの日本側記録には、たんに漂流民送還の事実を伝えるだけで、中国側の対応を意識した様子はまったく認められない。

（2）難夷撫恤令の施行と乾隆帝の銀牌下賜

乾隆二年の外国船撫恤令施行以後も、日本側の態度には変化がない。最初にこの令の適用を受けた漂流は、寛保元年（二七四一）に沖永良部島から帰国する途上で漂流し、浙江省に漂着した薩摩船であるが、この船に乗組んでいた薩摩藩士は「総兵の官所にて漂着の次第尋問あり、又知県の官所に出、仍て総督巡撫より帝都に奏問あり、数月を経て、^(注28)此者共日本に可送遣旨勅許有之由」と報告して、自分たちの送還にあたって官の関与と皇帝の裁可があったことを認めている。だが、長崎奉行所での審問がこの点に留意した様子は見られない。

しかし次に起きた漂流——寛延三年（一七五〇）十一月に金華山沖で漂流、百余日後に福建省福寧府福鼎県嵎嶼港に漂

着し、翌宝暦元年（一七五二）に送還された奥州南部領白浜村の神力丸の漂流民の場合は要路の関心を集めた。彼らは乾隆帝から銀牌（龍牌）を支給された上、送還に当たった福建省泉州府廈門海防庁と浙江省寧波府勤県から日本国王あての咨文が送られて来たためである。

送還にあたった中国船の説明によれば「乾隆帝杭州へ御幸の節、福建の総督自身杭州へ参られ、日本の難船のわけ被致奏聞、其後帝王北京へ帰朝の節銀牌総督へ被渡、それより知府に渡され、知府より知県に渡され、知県より荷主信公興へ被相渡、それより七人のものども頂戴いたし」たものであった。^(注29)

宝暦元年は中国の乾隆二十六年にあたる。この年、帝が南巡を行ったことは事実であるが、実録には銀牌下賜はおろか、日本人漂流民の撫恤についてすらまったく言及がみられない。むしろ皇帝の巡行に対応した地方官の態度がこのような反応となったかとも推察される。

咨文については長崎奉行が老中と協議の結果、返答することとなり、「長崎鎮台」の名で回答が送られた。

これ以後、銀牌下賜とともに地方官からの咨文を伴う送還が増えた事実は、乾隆令の反映といえようか。この後、宝暦年間に中国からの送還例は五件に上るが、広東省を経由した一例以外は寧波府その他の地方官から送還の咨文が添えられ、長崎奉行は回答を与えた。このうち三例は銀牌を与えられている。

ところが明和四年（一七六七）に、マニラ諸島へ漂流して中国に送られた筑前船二隻の乗組員を乍浦仕出しの中国船が送還した際、船頭汪繩武が持参した嘉興府の咨文の内容が不審であったため、長崎奉行が審問したところ偽作である旨が判明した。長崎奉行は咨文を返却し、今後は咨文を送っても回答しない旨を「急度被仰渡之」た。^(注30) 定着するかと思われた漂流民送還にあたって咨文を往復するという新関係は、これによって短期間で中絶するに到った。

しかし中国皇帝からの龍牌の下賜は、長崎奉行にとって関心の的となつたらしく、明和四年の事件の後、最初に安永四年（一七七五）に送還されて来た陸奥国小竹浜の永福丸の乗組員十六人と陸奥国山田浜の船の乗組員五人にたいし「唐国龍牌被相与候儀無之候哉」と質問している。^(注31) この後、じつに嘉永五年（一八五二）に至るまで、^(注32) 長崎奉行所で龍牌下賜の有無を問われた例が漂流民の記録に散見するのである。

あらゆる漂流記録が、長崎奉行所における審問の内容を均質に伝えているわけではないので断言はできないのだが、明和四年事件以後、幕末に中国との旧関係が解消するまで、中国船で送還された漂流民の長崎での審問に際しては、キリシタン入信の有無、外国から持ちかえった金品の有無という従来の質問と並んで、この項目が質問に加えられるようになったものと推定される。

ではこの銀牌とはどのような性格のものであろうか。最初に下賜された南部人たちは「此牌を首ニ懸ケ候節ハ、大切に致、貴き人に逢候ても、礼拝扑不致様、黄福「送還船の唐人の名」被申候」と理解していた。

その形態は「此銀牌、五爪之龍紋有之候。牌面皇賞と申文字有之候」「高サ三寸一分幅式寸 重 一両四錢」などと描写され、『南部人漂流記』という漂流記録には写生図も添えられている。左右に龍紋、下に西海波の文様を描き、中央に「皇賞」と記したその体裁は、軍功を表す「功牌」の形式に酷似している。おそらく「功牌」の意味を敷衍して、漂流民に与えることにより、皇帝の「遠人懐柔の至意」を表現しようとしたのであろう。

「功牌」とは先ののべたように軍功ある将士に与えるものである。その意味で勲章に似るが「其實勲章ノ如ク尊貴ナルモノニハ非ス寧ロ軍功ノ多少ヲ測ル標準トシテ用キラレ某等功牌ヲ受領スルコト幾次ニ及フトキハ某爵ヲ授クルノ規定アリ」と『清国行政法』は解説している。^(注33)

日本人漂流民への銀牌授与がほとんど定着しかけたこと、にもかかわらず中国側に記録がないことは、「功賞」と考えれば理解が容易である。

咨文が送られたことは直接には銀牌の下賜とは関係しない。しかし乾隆帝が銀牌を与えて優遇したことが、送還に当たった地方官に丁寧な行動をとらせた可能性は否定できない。咨文の内容は、漂流民送還の送り状というべきもので、厦門海防庁からの咨文を例にとると「本朝聖天子文教覃敷、四海凜一統之義、恩賞広被万方無勿届之句、故凡属外藩傾心向化恭輸誠以及遭風泊者、無不加意撫恤多方保護俾得安全」(和解によれば「恭くおもんみれば、本朝聖天子文教遍く敷四海、一統之儀を深くおもわれ、恩沢広く蒙り、万方いたらふといふ処なし、此ゆゑに外国心を傾け之に向ひ、謹て誠実之心を尽し候、風難漂流の者共に及ては、懇に撫育せしめ候、種々心を附安全を得さしめすといふ事なし」という皇帝の徳を強調した前書きの後、

漂流民送還の事実について記し、最後に「此誠天朝柔遠深、仁至周至渥所有風、撫恤緣由理合」（是誠に天朝遠方を懷せられ候仁心至て周く候ゆゑ、貴国之風難に逢候ものへ憐愍を加へられ候趣、申達度候）と送還にあたっての皇帝の柔遠の志を再度強調し、返事を求めて結んでいる。銀牌の下賜については一切、言及する所がない。

この咨文の送還の論理は、あくまで難夷撫恤令の論理の延長線上にあるが、他方では地方官から対等の形式である咨文によって「日本国王」宛に送られているなど、幕府にとっては容認できない形式をもっていた。にもかかわらず老中が長崎奉行による回答を認めたのは「先年より日本人渡海の儀数度有之候へとも、此度の如く委細に書付差上候儀無之由にて、御満悦被思召候」という結果であった。

返書は型どおり「貴国仁綱覆世、文教之化、格于四表、恭照本邦徳沢配天、恤生之意、溢于九関。凡編戸之氓、跨歴海洋、運輸貨殖、所以黎庶治生、寔係皇化、被而遭厄難者、靡不沐其庇蔭」（夫おもんみれば、貴国仁綱世を覆ひ、文教之化四表に至る、恭くおもんみれば、本邦徳沢天に均しく、生を恵むの心九関に溢る、凡編戸の民海洋を凌ぎ貨殖の計を致、この故民生のいとなみ皇化の広被にかゝれり、依て厄難に逢ひしもの、其庇蔭に休せずといふ事なし）と相手の徳を讃えた上で、漂流民を受け取った事実を確認し、「貴国懷遠之仁、洋洋盈盈、莫以尚焉、因此該商所俄貨物、即令貿易格外越例、迅速回棹、以酬効勞」（誠に貴国懷遠之深仁、洋々盈々として是に加ふる事なし、依之右の段々の功に酬はんと、その為積渡候荷物、早速商売申付、格外、順番を越して、速に令帰帆候、依之預御世話過分至極の謝意、回答を以申伸）と結んでいる。

この回答はまず老中が協議の上、和文を作り、それを漢文に直したといわれ、言い回しには細心の注意が払われたことを物語っている。まず「日本国王」に宛てた咨文に対して答咨では「長崎鎮府」（奉行）の名を用い、「大日本宝曆二年」の日本年号によって応じた。

さらに中国側が「わが天子の文教は四海に及び、恩沢は至らざる所がない」と、日本を包みこむ世界秩序のなかの問題として送還を語っているのに対して、返書では清国の仁が広く及んでいることを儀礼的に認めた上で、むしろ日本の徳沢が四方に及んでいることを対置し、「海を越えて遭難者が送還されるのもその皇恩によるものだ」と主張している。さらに結びでも、清国の懷遠之仁を認めた上で、これに報いるに貿易上、送還船には例外として順番を無視して積み荷

の即刻販売を許し、速やかに帰国させることで労に報いた、とする。つまり徳の問題においては中国の中華意識に自国の小中華意識を対置した上で、さらに実務的な報償を強調することによって巧みに問題を経済に限定しようと試みている。

中国的な価値体系から見れば極めて無礼な返信であるが、これが中国で問題とされなかったのは、あくまで礼部が関与する中央ではなく、地方レベルにおける文書の往復であったためだろう。またこの文書の影には、現実を送還に当たった中国商人の利害もほの見えているので、長崎奉行が利をもって報いたこともそれに応じた側面があったともいえる。明和二年の咨文の偽造も、経済的利益が見込まれたからこそ行われたのである。

四、送還の論理

最初にのべたように、近世の日本においては、相当数の漂流の体験が、主として漂流船員の異文化体験に対する関心という角度から整理、研究されてきた。このなかで漂流民は自己が送還され得たという事実をどのように認識していたのであろうか。近世日本の漂流記は、漂流経験者自身が書とどめたものではなく、もっぱら口述された体験を、他者が記録したものであるから、経験した主体の意識と記述者の意識を分離することには、困難がともなう。具体例ごとに詳細な分析が必要であるが、さしあたり問題点を指摘するなら、一方では、送還は日本国の威徳として認識される傾向があり、他方では、送還制度の完備によるさまざまな給付を「中国人の親切」と認識する場合があった。つまり〈漂流者―記録者〉の関係のなかで、中国側の整備された送還体制は認識の外に置いたまま、現実はその制度から受けた恩恵は、国恩（相手側ではなく、あくまで漂流民の帰属する日本国の）と相手側との人間性という二つの極に分離したものとして認識されて来たといえようか。

寛文八年（一六六八）に尾張国知多郡大野村の船がバターン島（巴旦島）漂着した。外交関係がなく、日本の存在さえ知らないこの島で乗組員一同は「島の者共何百人とも不知……扱小船数限りなく乗参り、親船の荷物うはひ取、乍十五人

不殘衣類をはぎ取、赤はたかに致し、あなたこなたへころばし、下帯迄とき、金銀錢など少宛持候を、すきと取申し候」
 という目にあっている。^(注34)

この乗組員たちは三年目に船を作って自力でバターン島を脱出し、中国の浙江省のあたりの宝童という島へたどりつた。ここで日本語の判る者から米などを与えられ、長崎への航路を教えてもらって自力で帰国した。

彼らは、中国に着いて初めて親切な取扱いを受けたことを「日本の事を存候程の国にて、かやうにいたし候と存、皆々有難日本へ参着致し候様心地仕」と認識している。すくなくとも何らかの関係のある場からなら送還は可能だという認識が示されている。ところで中国で日本のことが知れているのは「偏に天照大神様の御めぐみと、又は上様の御威光、かかる異国迄も広かり」ているためだとしたテキストがある。

この漂流の記録は「中天竺の内馬丹島（巴旦島）へ漂流候水主口上」と題されているもので、テキストによってはこの部分を欠くものがある（たとえば石井研堂編『異国漂流奇談集』所収「馬丹島漂流記」）ため後人の加筆を疑わせはするものの、一応は漂流民自身の述懐だと思われる。相手側の善意というよりは、日本の威光に送還原理を認めた点は近世の日本が漂流民送還を自己中心の中華意識で理解しようとしていたことの現れであった。

すでに清国成立直後に越前三国船の乗組員が送還されたさい、幕府要路では、彼らが厚遇されたのは、清が日本をはばかったためであるという見解があった。「この漂流民を殊遇ありしは、彼国、本邦を敬憚せし事のよし引書中に見ゆ」（『通航一覽』巻二百三十五）とある。これは同時代の見解を反映しているとともに、幕末に『通航一覽』を編集した林家の一統の見解をより大きく反映しているかもしれないが、清の側の中華意識にたいするに日本の小中華意識をもって対置したという意味で近世の日中関係を象徴している。

元禄年間の送還にあたっては、中国側が官の事業として送還にあたっていることは充分、認識できたはずであるが、それは、相手側の内部の体制であって、送還される側の日本には係わらない論理である。送還はいわば自然現象であった。おそらくそれは近世の日中関係を外交を含まない民間の貿易すなわち「通商」関係として規定したと係わるのであろう。強いていうなら、それは日本の側の幕府ないし天皇の徳によるものだと言明されたであろう。

山片蟠桃は漂流民の異文化経験に関心をもった学者の一人であるが、寛政六年（一七九四）安南国に漂着し、マカオを経て中国官吏の手で乍浦から送還された仙台領名取郡閑上村の大乗丸の事件と、二年後に仙台領に広東の漁船が漂着した事件とを対比しながら「広東人仙台ニ漂着シ、仙台人広東ニ漂着シテ、同ジク慰勞シ、トモニ護送シ国ニ帰ルヲ得ルコト、天下ニ泰平ノ効驗、四海一徹ノ政事、イハズシテ心ヲ同ジクス。盛事ニアラズヤ」という感想をのべた。^(注35)

伝統中国の国際秩序にかんする意識は、中国を中心とする世界帝国として意識される。その基礎をなすイデオロギーが、いわゆる中華意識であるが、それは皇帝から流れ出す徳として表現される。徳川幕府はこれに自らの徳を対置した。それは宝暦年間に咨文が交換された時期にもっとも先鋭に表現されるようになった。つまり日本漂流民が送還されるのは將軍の徳が四囲に及んだためだという理由づけである。

一方、近世の漂流民は中国においてきわめて「結構なる」取扱いを受けたと感じた場合もある。^(注36)これは中国の側に送還を保証する体制があったことの感覚的な表現に他ならない。しかし日本の漂流記研究では従来、相手の送還体制の存在に気づいていなかったため、これを単なる相手の善意に解消して理解してきた。中国における送還体制の整備という事実を認識した上で漂流記録を新しい目で見直すことにより、一層、深い知見が得られるように期待したい。

注

(1) 荒野泰典「近世日本の漂流民送還体制と東アジア」／『近世日本と東アジア』（東京大学出版会・一九八八年）所収。

(2) 本漂流については「韃靼漂流記」が著名である。園田一亀『韃靼漂流記の研究』（南満州鉄道株式会社庶務課 奉天「瀋陽」一九三九年）が関係史料を網羅している。

なお『通航一覽』は、卷二百三十六に本漂流記を収録しているが、他に卷二百二十九（唐国・江蘇省蘇州の部）にも、あたかも別の漂流であるかのような誤った伝承を重複して収めている。

(3) 『清実録』（中華書局 一九八五年北京）（三）一八六ページ「世祖章皇帝「順治」実録」卷二十一／七丁。ここで用いた『清実録』の影印版は現存する優良な写本を総合して底本として中国で刊行されたものである。従来、一般に使用されてきたの

は、盛京崇謨閣蔵本を影印した『大清歴代実録』（満日文化協会 一九三六年）ないしはその翻印である台湾華聯書局版（一九六四年）であるが、新しい中華書局版『清実録』の編著者の指摘によれば旧版には「倭」「奸細」「寇」を「日」「敵探」「敵」と改作した箇所がある他、定稿本とは文章の異同が大きい部分も指摘できるという（『清実録』（一）、巻頭の「影印説明」）。本文では可能な限り旧版の『大清歴代実録』と対校し、旧版の丁数をも併記した。本論文の関与する範囲では、両者のあいだにテキストの相違は認められなかった。

（4）崔溥『漂海録』三巻。本人の没後七十年の一五七三年（朝鮮宣祖六年、明万暦元年）に外孫の柳希春が銅活字で印行したものを東洋文庫が蔵する。近年、中国で葛振家点注の鉛印本『漂海録——中国行記』（社会科学文献出版社・一九九二年・北京）が「北京大学太亜研究中心 朝鮮学叢書」の一冊として刊行された。なお関連して後藤均平「漂海録」（季刊『青丘』第十四号 一九九二年冬季号）という慈味にあふれるエッセイがある。

（5）王在晋『海防纂要』巻十「飄倭」。伊藤東涯『蓋簪録』の引用によって知られる。石井研堂『漂流奇談全集』に「台州漂流記事」の題で収録。

（6）『歴代宝案』第一集 巻七ノ刊本（一）二二六―二七ページ。辺土名朝有『「歴代宝案」の基礎的研究』（一九九二年 校倉書房）三五一―三ページのテキストによって校訂した。

（7）康熙十六年七月二十二日の福建布政使司の琉球国王への咨文のうちに、福建総督郎密の疏を引いて、「琉球国難彝雜氏等十二名、照例給与口糧銀兩、暫為泰養題明来応、仍照例給与銀米泰養、又称該彝既無原来船隻、其其貢使吳美德等原坐船二隻普同」云々の語が見える（『歴代宝案』第一集巻十「国立台湾大学 台北 一九七二年」（一）三二六ページ）。さらに『歴代宝案』には、雍正二年に福建省に漂着した「琉球番民西馬不孤」らが「口糧銀米」を給与されて撫恤され、進貢船に伴われて送還された例、雍正四年に「琉球国番民黒島等男婦伍拾参名」が浙江に漂着し、福建に送られて接貢船に帯同されて帰国した例などが記録されている（第二集巻十五ノ刊本（四）一九八六ページ）。

（8）「高宗純皇帝「乾隆」実録」巻五十二 二十六丁II『清実録』（五）八八九ページ。なお「琉球国中山王尚 為咨覆恩賜撫養飄風難夷以全蟻命坐還故土事」（乾隆四年十月二十七日付）の咨文（『歴代宝案』第二集巻二十三 刊本（五）二三〇七―八ページ）によって、乾隆帝の難夷送還令の契機となった漂流は、乾隆二年六月十六日に浙江の定海地方に漂着した西表島の首里大屋

子ら三十六名と、六月二十四日に象山へ漂着した新垣ら十名（一名は象山で病没）であったことが判る。

(9) 『大清会典事例』（光緒）巻二百七十（中華書局影印本 11 八六六六ページ）

(10) 宮田俊彦『琉球・清国交易史―二集「歴代宝案」の研究』（第一書房 一九八五年）のうち「九、琉球人飄風難民に対する清朝の取扱い」。宮田氏も当然、康熙二十三年令の存在を前提にしているが、乾隆二年の撫恤難夷令の存在には気づかなかったらしく、康熙二十三年令ですべてを説明しているのは了解しがたい。ただし『歴代宝案』から漂流例を網羅された労は多とすべきである。

(11) 日本船の漂流については、現在のところもっとも詳細と考えられる川合彦充の『日本人漂流記』（社会思想社・教養文庫 一九六七年）付録の「近世日本漂流編年略史」によった。この年表には典拠が示されていないので『通航一覽』その他で典拠の確認を行った。

中国船の漂着については『通航一覽』『同統輯』『種子島家譜』によった。なお中国船の漂着史料にかんしては関西大学の大庭脩、松浦章氏らによって東西学術研究所資料集刊として「江戸時代漂着唐船資料集」が刊行中で、主要漂着例ごとにまとめた史料が、現在まで五冊、出版されている。

(12) 安永二年（一七七三）に沖之永良部島から薩摩へ帰航する途上、中国の浙江省寧波府定海県舟山に漂着した薩摩船の漂流記である「薩州人唐国漂流記」（石井研堂編『漂流奇談全集』所収）は、乗組みの薩摩藩士池山喜三佐衛門、中原仲左衛門の長崎奉行所における口述書である。中国で応対した官吏の役職名を一々現地で確かめて詳しく記録している点に特色がある。同書によると最初に接触した官吏は「千摠官と申武家の下司にて把摠と申、海辺を守り候役人にて御座候よし」であった。千摠は千総が正しく、漢人緑營に属する海岸防衛の陸兵で尉官に相当する。

(13) 日本むけ貿易港としての乍浦の地位については、松浦章「乍浦の日本商問屋について」（『日本歴史』三〇五号一九七三年十月）。

(14) 『大清歴代実録』の記事の採用基準は理論上、一定であるが、現実には時代の趨勢や編纂官の性格を反映して、皇帝ごとに微妙に採録基準は異なるようである。感覚的な印象にすぎないが、漂流民記事にかんする限り、時代が下るに従って密になる。その境界は乾隆と嘉慶のあいだあたりであるように思われる。

(15) ①の陸奥船については『清代外交史料』道光朝 二／七丁表／九丁裏に福建巡撫および浙江巡撫の奏摺を採録している。

この史料集は軍機処の外交関係檔案を選んで日時順に配列したもの。嘉慶朝六冊。道光朝は四冊で中断している。ただし朝鮮・琉球などの朝貢国関係史料は除いている。別に史料集を作る意図があったためらしい。③④の薩摩船財久丸については、『江蘇巡撫陶澍奏日本夷船遭風漂到鎮洋県境照例撫卹撥船指引出洋回国摺』／『清代外交史料』道光朝 二／十九丁裏／二十丁裏。「浙江巡撫程含章奏護送日本遭風難夷至乍浦安頓俟東洋採銅船出口附帶帰国摺」／『清代外交史料』道光朝二／二十一丁裏／二十二丁表。

⑩の越前船にかんしては「署浙江巡撫劉彬士奏報江蘇送到之日本国遭風難夷搭船回国日期摺」／北平故宫博物院編『清代外交史料』道光朝 二(一九三二年) 二十七丁裏／二十八丁表)。

(16) 朝鮮の場合も同様の基準で中国の実録に記載されたことは、道光十二年六月七日の実録の「朝鮮国遭風難夷撫卹如例」が過ぎの摺に対応していることが傍証になる。「浙江巡撫富呢揚阿奏、為朝鮮国遭風難夷、由江南省漂到浙境循照成案、派員護送赴京、附便遣令帰国摺」(道光十二年六月初七日硃批)／故宮博物院文獻館編『史料旬刊』第十一期「道光朝外洋通商案」天三百九十九／四百丁。

道光十二年二月に朝鮮国の船主・姜信訓ら十五人がまず江南省に漂着し、中国船の救助を得て浙江省の定海県に到った事件を、浙江巡撫・富呢揚阿が報じたもので、積荷の米、豆などの代金にみあった銀を与え、官吏に付添わせて北京の礼部に送り、帰国を計らせるという内容である。なお文中に「道光十一年黄巖県に漂着した金在振らの先例に倣う」という言葉がある。

(17) 琉球の場合、漂流民送還にあたって中国側で礼部および福建布政使司から琉球国王に与えた咨文と琉球国王からの答謝の咨文がある。このうち礼部の咨文は救助の状況を説明するために、おおむね督撫からの摺文を引用しているので漂流の状況、および皇帝の裁可の日付が確定できる。⑥の場合、『歴代宝案』第二集卷一四四刊本(十) 六〇〇一／二ページ。⑦⑧は朝鮮經由の送還であって、『歴代宝案』第二集卷之一四四刊本(十) 六〇〇三／四ページおよび第二集卷之一四六／刊本(十一) 六一〇七ページに記事がある。さらに本件の朝鮮における救助については『李朝実録』卷二十八／十一丁裏刊本(学習院東洋文化研究所)第五十一冊に記載がある。

(18) いずれも道光六年十二月二十三日。一は上海県の王群芳ら十四人の奇界島漂着。『歴代宝案』第二集 卷百四十四／刊本(十)

六〇〇一ページ以下。二は蘇州府崑山県の陳志貴など二十名。『歴代宝案』第二集 卷百四十四／刊本（十）五九九六ページ以下。七年二月二十五日付の琉球国山北府知府の発給した護照（証明書）で漂流の経過を知ることができる。前者はとくに護送船を仕立てて福建へ送還、後者は船を修理して自力で帰国させた。

（19）中国人の朝鮮漂着については、第一は純祖二十六年（清の道光六年）十一月八日に羅州の大耳島に漂着した浙江省人十六名。『李朝実録』十二月庚戌の条、卷二十八／十九丁裏「刊本（五十一）、二三八ページ」。中国の場合同様、実録の背景をなす史料として『備辺司謄録』第二百十四冊、丙戌十二月初三日。および第二百十五冊、丁亥正月初八日、十二日、の条に関連記事がある。刊本（韓国国史編集委員会）第二十一。八一〇、八一五、八一九～二二ページ。

第二は純祖二十七年二月二十五日の『備辺司謄録』（第二百十五冊。刊本 第二十一 八三二ページ）に記載された全羅道漂着の福建船であるが、『李朝実録』にも『通文館志』にも記載がない。船を修理して直接、帰国させたためかも知れない。

第三は純祖二十七年七月、龍川府漂着の福建人二十七名。『李朝実録』卷二十九、二十丁裏。七月甲寅「十一日」条。『備辺司謄録』（第二百十五冊。刊本（第二十一）八八六ページ）。

（20）延宝元年（一六七三）、陸奥国相馬の船。／『通航一覧』卷二百十五（刊本（五）四四二～三ページ）。

（21）「広東より漂着之日本人送り参候船之船頭申口」／『華夷変態』（東方書店一九八一年再版）卷上、九一九ページ以下。関連史料は『通航一覧』卷二百十九（刊本（五）五〇三ページ以下）にある。

（22）「十番高州船頭游伝孚船に漂着之日本人拾壹人乗せ渡り申に付船頭申口」／『華夷変態』卷中、一四一七ページ以下。関連史料は『通航一覧』卷二百二十（刊本（五）五〇八ページ以下）。

（23）「六拾九番宋居膝船之唐人共申口」／『華夷変態』中卷 一六八七～九ページ。関連史料は『通航一覧』卷二百二十（刊本（五）五一四ページ以下）。

（24）元禄六年「式拾九番普陀山船唐船之唐人共申口」「三拾番台州船之唐人共申口」「三拾四番福州船之唐人共申口」「四拾三番寧波船之唐人共申口」「四拾六番泉州船之唐人共申口」「五拾式番寧波船之唐人共申口」「五拾七番普陀山船唐船唐人共申口」「七拾式番咬留巴船之唐人共申口」「七拾三番咬留巴船之唐人共申口」。いずれも『華夷変態』中卷 一五三〇～八七ページ。

（25）この日本人たちは七人ずつ二隻の中国船に分乗、送還された。「七拾六番普陀山船之唐人共申口」および「七拾九番普陀山船

船頭程敏公申口」がある。『華夷変態』中巻一五九三～一六〇四ページ。ここでの引用は七十九番船のもの。関連史料は(注24)を含めて『通航一覽』巻二百一十(刊本(五)五七六ページ以下)。

(26) 『通航一覽』巻二百一十一(刊本(五)五二二ページ以下)。

(27) 『清実録』(五)七五五ページ上。

(28) 『通航一覽』巻二百二十五。刊本(五)五八九ページ。

(29) 『通航一覽』巻二百七十八。刊本(五)四八一～四、四九三～五ページ。ここには咨文の和解しか掲載されていないが、「南部人漂流記」(荒川秀俊編『近世漂流記集』法政大学出版局 一九六九年)には旧伊達伯観瀾閣蔵本による写真版が掲載されていて銀牌の写生図や咨文、回答の原文を知ることができる。

(30) 『通航一覽』巻百八十一。刊本(四)五九九～六〇一ページ。

(31) 『通航一覽』巻二百二十。刊本(五)五一七ページ。

(32) 『通航一覽統輯』巻四十三。刊本(二)二二二ページ。

(33) 織田万『清国行政法』(台湾臨時慣習調査会 一九〇五年)一上、八五ページ。織田は「功牌」の下賜を皇帝の権利の一つとして位置づけている。

(34) 『通航一覽』巻二百七十一、刊本(七)五十一～六十二ページ。

(35) 山片幡桃『夢の代』地理第二(日本思想大系43 岩波書店 一九七三年)二五三ページ。

(36) 文政九年に長江河口に近い江蘇省川沙庁に漂着した越前船・宝力丸の漂流記は代表的な例である。中国側記録は(注14)参照。日本側記録は「北海漂流話」(松浦静山『甲子夜話統編』巻十三)および石橋重吉編『越前四箇浦 南清漂流記』(福井図書館 一九四〇年)。本漂流では、日本船員が、朝鮮、琉球の地に漂着すれば救助・送還が可能だと認識していたらしい記述を含み、他方では漂着地の中国官人から詩を贈られるなど、送還体制を考える上で興味ぶかい問題を含んでいる。